

平安京右京二条二坊九町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京二条二坊九町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成13年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、店舗建設工事に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

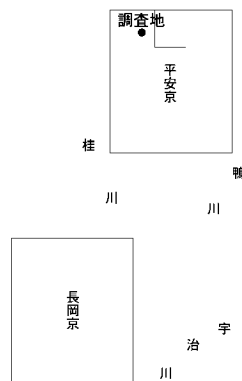
平成21年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京二条二坊九町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京門町 31
- 3 委 託 者 京都中央信用金庫 理事長 布垣 豊
- 4 調査期間 2009年1月5日～2009年1月30日
- 5 調査面積 200 m²
- 6 調査担当者 伊藤 潔
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 挿図の順に土器類・瓦類・木製品・石製品ごとに通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 13 本書作成 伊藤 潔
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
3. 遺 構	7
(1) 平安時代の遺構	9
(2) 中世以降の遺構	10
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦類	16
(4) 木製品	19
(5) 石製品	19
5. ま と め	20

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区全景 (西から)
		2	2 区全景 (西から)
図版 2	遺構	1	土坑 35 (南から)
		2	1 区東壁断面 (西から)
図版 3	遺物	1	土坑 35 出土土器
		2	土坑 44 出土土器
		3	土坑 45 出土土器
図版 4	遺物		土取土坑他出土土器 1
図版 5	遺物		土取土坑他出土土器 2
図版 6	遺物		軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査前全景（南西から）	1
図2	作業風景（南西から）	1
図3	調査位置図（1：5,000）	2
図4	調査区配置図（1：300）	2
図5	遺構平面図（1：125）	7
図6	北壁・東壁断面図（1：50）	8
図7	土坑35実測図（1：20）	9
図8	土坑44・45実測図（1：50）	9
図9	土坑35・44・45出土土器実測図（1：4）	12
図10	土取土坑他出土土器実測図1（1：4）	13
図11	土取土坑他出土土器実測図2（1：4）	14
図12	墨書土器	15
図13	軒瓦拓影・実測図（1：4）	17
図14	木製品・石製品	18
図15	木製品実測図（1：4）	19
図16	石製品実測図（1：4）	19

表 目 次

表1	周辺主要調査一覧表	3
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	11
表4	掲載土器一覧表	21

平安京右京二条二坊九町跡

1. 調査経過

京都市中京区西ノ京町 31 で、京都中央信用金庫円町支店の建設が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課という）が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、建物解体の影響は軽微で、平安時代前・中期の遺物を多量に含む遺物包含層と、園池と考えられる堆積土が検出されたため、発掘調査の指導がなされた。発掘調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所が担当して実施した。

調査は文化財保護課の指導により、200 m²の調査範囲が指定され、残土置場確保のため、1区（北側 110 m²）、2区（南側 90 m²）の調査区を設定し、反転して調査を行った。

調査においては、節目ごとに文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を進めた。

2. 位置と環境

東を西大宮大路、西を道祖大路、南を二条大路、北を中御門大路によって囲まれた右京二条二坊は、右京の諸司厨町である。『拾芥抄』の西京図によれば左馬町（一・二町）、兵部町（三町）、大学町（六町）、采女町（七町）、左衛門町（八町）、大將軍政所民部省（九・十六町）が並び、小野篁第（四町）や学館院などが点在していた。大將軍政所民部省とは、もと民部省の厨町であり、大將軍社領となったが、民部省と呼ばれた。平安時代後期になると諸司厨町全体は衰退したが、左衛門町や民部省町が北野社の御神供・御壇供神人の居住地となった。

調査地は円町交差点南東角の敷地である。当該地は平安京の条坊では、北側を中御門大路、西側を野寺小路、南側を春日小路、東側を西堀川小路に四方を画された右京二条二坊九町の北端中央部にあたる。また1町内を区分する「四行八門制」では、九町内の「東二・三行北一門」の二戸主分および中御門大路に該当する。



図1 調査前全景（南西から）



図2 作業風景（南西から）

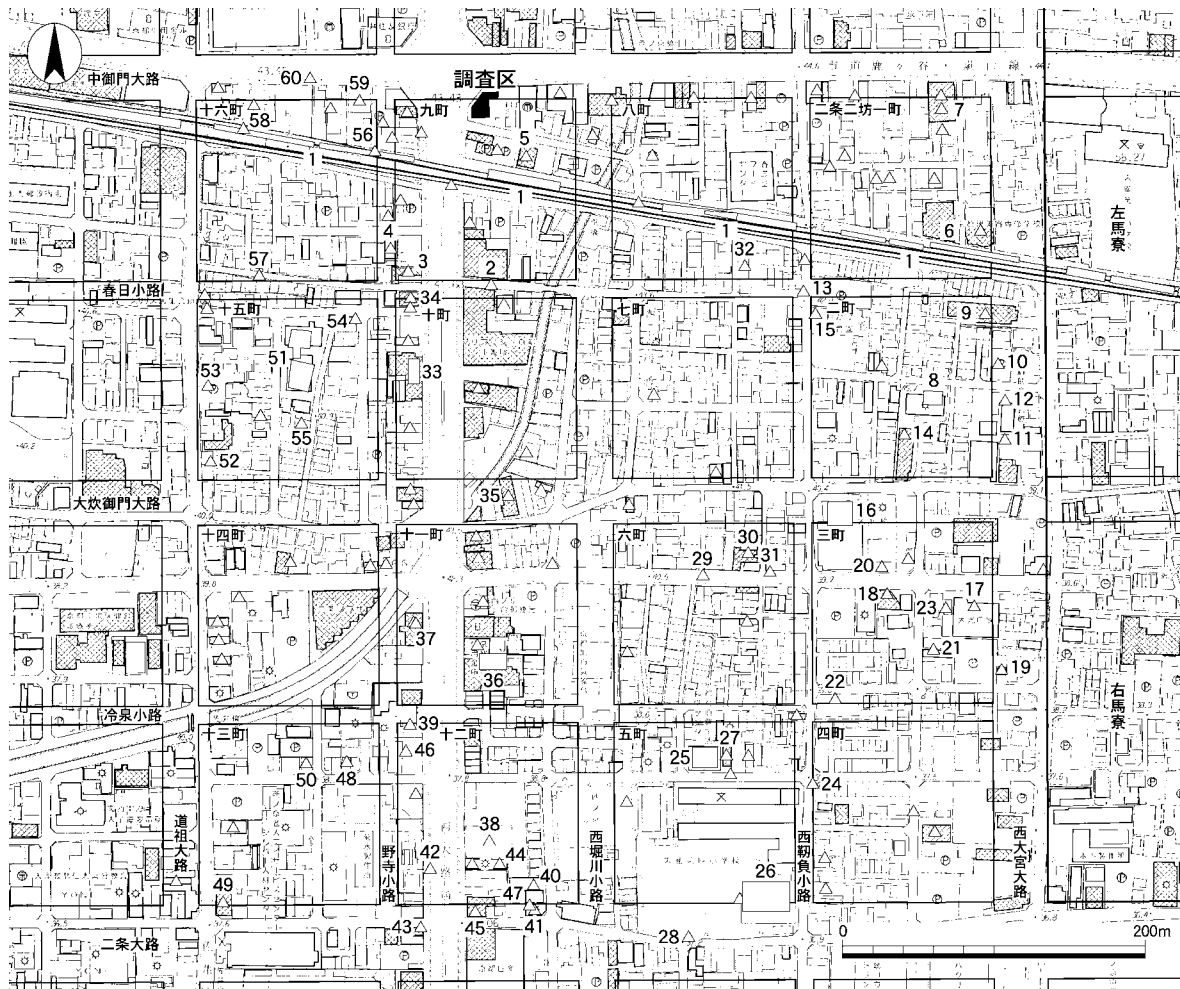


図3 調査位置図 (1 : 5,000)

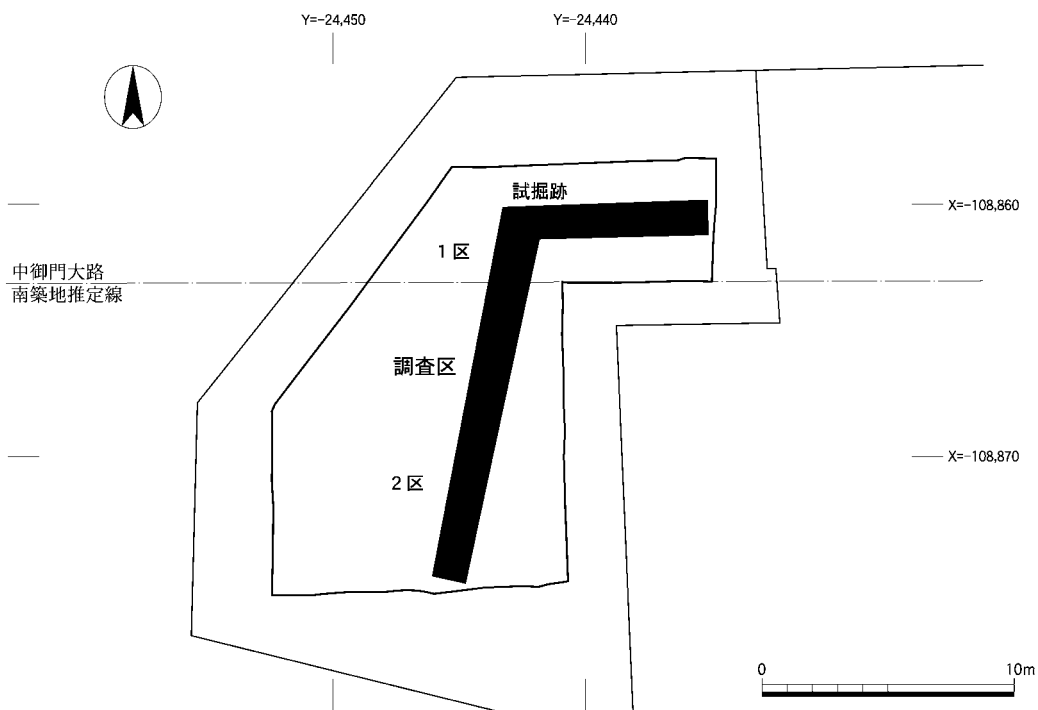


図4 調査区配置図 (1 : 300)

表1 周辺主要調査一覧表

番号	調査地区	調査機関	調査方法	調査年	文 献
1	二条二坊一・八・九・十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1997	「平安宮左馬寮一朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
2	二条二坊九町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1981	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度
3	二条二坊九町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1982	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度
4	二条二坊九町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1983	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度
5	二条二坊九町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度
6	二条二坊一・八町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	2000	「平安京右京二条二坊(1)」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
7	二条二坊一町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度
8	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1981	「右京二条二坊(1)」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度
9	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1982	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度
10	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2008	『京都市内遺跡立会調査報告』平成19年度
11	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度
12	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度
13	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度
14	二条二坊二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度
15	二条二坊二町	京都市文化財保護課	立会	1979	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度
16	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1981	「右京二条二坊(2)」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度
17	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度
18	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度
19	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度
20	二条二坊三町	京都市文化財保護課	立会	1979	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度
21	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度
22	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度
23	二条二坊三町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2005	『京都市内遺跡立会調査報告』平成17年度
24	二条二坊四町	平安京調査会	立会	1974	「下水道工事に伴う平安京跡の立会調査」『論集平安京研究』2号
25	二条二坊五町	京都府教育委員会	発掘	1980	「平安京右京二条二坊五町跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3
26	二条二坊五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1995	「平安京右京二条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
27	二条二坊五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度
28	二条二坊五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度
29	二条二坊六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度
30	二条二坊六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度

番号	調査地区	調査機関	調査方法	調査年	文 献
31	二条二坊六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度
32	二条二坊八町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1980	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度
33	二条二坊十町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1981	「右京二条二坊(3)」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度
34	二条二坊十町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度
35	二条二坊十町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度
36	二条二坊十一町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1983	「右京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和58年度
37	二条二坊十一町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度
38	二条二坊十二町	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	2003	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成15年度
39	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度
40	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1997	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度
41	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度
42	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1981	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度
43	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1981	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度
44	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度
45	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1995	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度
46	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2001	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度
47	二条二坊十三町	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1996	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度
48	二条二坊十二町	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	2001	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成13年度
49	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度
50	二条二坊十二町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1980	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度
51	二条二坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	2000	「平安京右京二条二坊(2)」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
52	二条二坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度
53	二条二坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2007	『京都市内遺跡立会調査報告』平成19年度
54	二条二坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1982	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度
55	二条二坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度
56	二条二坊十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度
57	二条二坊十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1981	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度
58	二条二坊十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2002	『京都市内遺跡立会調査概報』平成14年度
59	二条二坊十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度
60	二条二坊十六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度

※ 番号は図3の調査地点の数字と対応する。

当九町では、これまでの調査例として発掘調査1件、試掘調査・立会調査13件がある。当該地南側の調査区において、平成9年度にJR山陰線の高架化に伴って実施された調査(表1-1)では、湿地状遺構から多量の遺物が出土した。土馬、斎串、刀子形など祭祀関連の遺物が多く出土し、この付近が平安時代前期から祭祀の場として利用されていたことが窺える。試掘・立会調査では、春日小路路面(表1-2)、平安時代中期の土坑、後期の包含層(表1-3)、平安時代中期の包含層(表1-4・5)などが検出されている。

一町では、発掘調査2件、試掘・立会調査12件がある。JR山陰線高架に伴う調査(表1-1)では、町内の東側で平安時代末期の園池状遺構を検出したが、その北側で実施したJR山陰線立体交差化に伴う側道建設に伴う調査(表1-6)で、西大宮大路の路面であることがわかった。また西大宮大路西側溝や西築地跡の基底部の地業が検出された。(表1-7)では、平安時代後期の東西溝が検出されている。

二町では、発掘調査1件、試掘・立会調査8件がある。二町の中央部における発掘調査(表1-8)では、平安時代中期の東西方向の柵、後期の方形縦板組の井戸が検出され、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶器、瓦器が出土した。(表1-9)の西大宮大路の推定地では、南北方向の河川跡と、この河川から東西方向に延びる溝2条が検出され、その1条には取水施設らしい遺構が付設されていた。河川は幅5m以上、深さ1mで、平安時代から鎌倉時代にかけて西大宮大路に沿って流れていたと推定される。(表1-10)では、平安時代末期から室町時代の東西溝、瓦組暗渠が検出されている。(表1-11～15)では、平安時代から鎌倉時代・室町時代の遺物包含層が確認されている。

三町では、発掘調査1件、試掘・立会調査9件がある。三町の北西部における発掘調査(表1-16)では、平安時代の大炊御門大路南側溝、井戸、低湿地遺構、柱穴群が検出された。始良火山灰(AT)も確認されている。低湿地遺構(SX1)は、大炊御門大路の推定部分から検出されている。SX1からは、多量の遺物が出土したが、なかでも「天曆七」(953)の墨書がある緑釉陶器が出土している。SX1出土の土器群が、土器編年に実年代を与えるうえで重要な資料となった。(表1-17)の試掘調査でも平安時代中期の土坑が検出されている。(表1-18～20)では平安時代中期から後期の包含層、(表1-21～23)では室町時代の包含層が確認されている。

四町では、試掘・立会調査が5件ある。昭和49年度に実施した下水工事の立会調査では、西鞆負小路東側溝(表1-24)から「康保二年」(965)の題箋が出土している。

五町では、発掘調査2件、試掘・立会調査7件がある。五町の北部中央付近における発掘調査(表1-25)では、平安時代中期の土坑、後期の掘立柱建物跡・柵、平安時代末期から鎌倉時代の溝が検出され、12世紀末までの遺物が多量に出土している。町の南東隅における発掘調査(表1-26)では、9世紀から10世紀の二条大路北側溝、柵、大型掘立柱建物跡、小型掘立柱建物跡、井戸、祭祀遺構などが検出された。二条大路では、北側溝推定部分に9世紀代の側溝が掘削され、その後10世紀代に3回以上南に移動しながら掘り変えられており、平安京条坊の変遷過程をとらえることができた。(表1-27)では平安時代前期の包含層、(表1-28)では湿地状遺構が検出されて

いる。

六町では、試掘・立会調査が5件ある。(表1-29)では、平安時代中期の池状堆積および包含層が、(表1-30)では平安時代の湿地状堆積が、(表1-31)では湿地、落込みが検出されている。

七町では、試掘・立会調査3件があるが、遺構、遺物は検出されていない。

八町では、発掘調査2件、試掘・立会調査7件がある。(表1-1)では、平安時代中期から後期の園池遺構とそれに付随する遺構が検出された。池の検出幅は東西35m、深さ1.2mである。兩岸の南側が狭まっていることから池の南辺に近いと考えられている。(表1-32)では、平安時代中期の包含層が確認されている。

十町では、発掘調査1件、試掘・立会調査11件がある。(表1-33)の発掘調査では、平安時代の井戸、掘立柱建物跡、土坑、室町時代の溝などが検出されている。井戸は平安時代前期(9世紀)と後期(11世紀)のものがあり、多量の遺物が出土した。(表1-34)では平安時代中期の土坑、包含層、(表1-35)では平安時代中期から鎌倉時代の包含層が確認されている。

十一町では、発掘調査1件、試掘・立会調査8件がある。(表1-36)の発掘調査では、平安時代前期から中期の掘立柱建物跡、柵、平安時代末期から室町時代の湿地、柵、溝などが検出されている。掘立柱建物は南北2間×東西3間で東に庇が取り付く。湿地から平安時代末期から室町時代の遺物が多量に出土しており、この付近では鎌倉・室町時代に至るまで人々の生活が連綿として続いていたことが窺われる。(表1-37)では、平安時代の包含層が確認されている。

十二町では、試掘・立会調査12件がある。(表1-38)では、湿地状遺構(池)と、掘立柱建物跡が検出されている。(表1-39)では平安時代中期の土坑、(表1-40)では平安時代中期の湿地状遺構、(表1-41)では路面、鎌倉時代の土坑、平安時代中期から後期の包含層が検出されている。(表1-42～47)では、平安時代中期から室町時代の包含層が確認されている。

十三町では、試掘・立会調査5件がある。(表1-48)では、平安時代中期の井戸が検出されている。(表1-49)では、平安時代前・中期の包含層が確認されている。なお(表1-50)では、縄文時代早期の押型文深鉢が出土している。

十四町では、試掘・立会調査6件があるが、遺構、遺物は検出されていない。

十五町では、発掘調査1件、試掘・立会調査7件がある。(表1-51)の発掘調査では、平安時代前期の井戸、中期の掘立柱建物跡、柵、室町時代の井戸などが検出されている。始良Tn火山灰(AT)も確認されている。(表1-52)では火山灰が確認されている。(表1-53)では平安時代前期から後期の東西溝が検出されている。(表1-54・55)では、平安時代前期から中期の包含層が確認されている。

十六町では、発掘調査1件、試掘・立会調査9件がある。(表1-1)では、平安時代前・中期の井戸、野寺小路西側溝が検出されている。緑釉瓦片や凝灰岩片が出土している。(表1-56)では、平安時代の井戸状遺構、落込み、平安時代中期から後期の包含層が検出されている。(表1-57・58)では平安時代後期から末期の包含層、(表1-59・60)では火山灰が確認されている。

3. 遺 構

調査地は北東から南西へ傾斜しており、0.8mの高低差がある。

基本層序は、北側では盛土（図6-1層:0.05～0.15m）、第1層灰黄褐色砂泥（同2層:0.1m）、第2層黒色泥砂（同13層:0.2m）、北東隅部で第3層黒色シルト（同20層:0.2m）、黄灰色シルト（同29層:標高43.30m）の地山となる。

南側では盛土（0.1m）または第2層黒色泥砂（0.05m）以下黄灰色シルト（標高42.95m）の地山となる。

検出した遺構としては、建物解体時の攪乱および中世以降の土取土坑であり、平安時代の遺構は、調査区北東部で検出した土坑35と、2区南東隅で検出した土坑44・45がある。

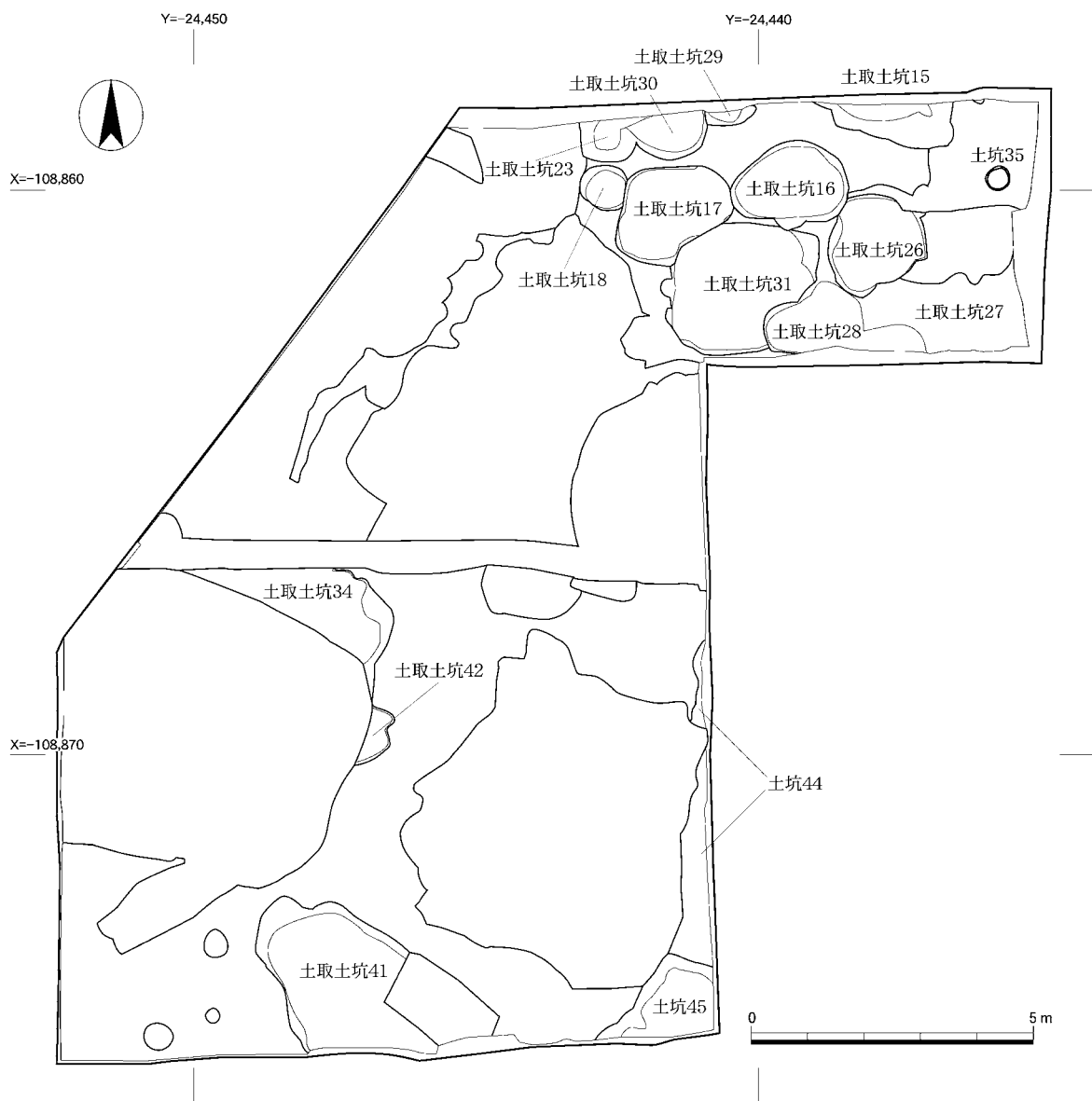


図5 遺構平面図 (1:125)

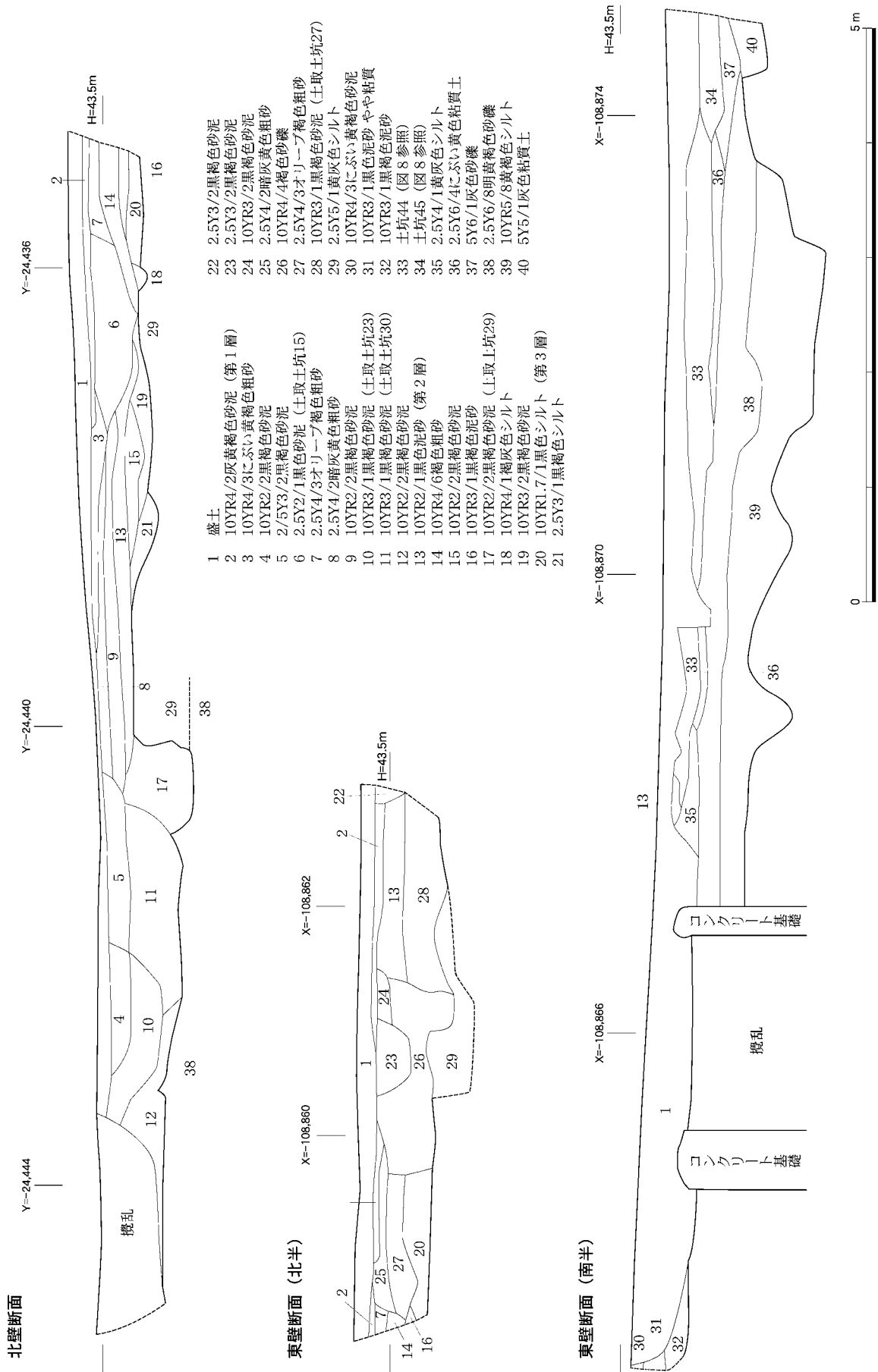


図6 北壁・東壁断面図 (1:50)

(1) 平安時代の遺構

土坑 35 (図 7、図版 2-1) 調査区北部の黄灰色シルト上面で検出した。0.4m の円形の掘形に、深さ 0.15m で、径 0.36m の曲物側を据えている。底の標高は 43.00m で、湧水層まで達していない。埋土は黒褐色砂である。10 世紀前半の土師器が 4 個体出土した。そのうち 2 点は外面に「米」の線書きの墨書がある。また、1 点は内面に白色土を塗っている。祭祀関連遺構と考えられる。

土坑 44 (図 8) 2 区東壁沿いで検出した落込みの一部であり、土坑 45 を切る。埋土はオリーブ褐色粗砂から褐色粗砂で 10 世紀代の遺物が少量出土した。

土坑 45 (図 8) 調査区南東隅で一部を検出した落込みであり、東西 1.5m 以上、南北 1.8m 以上、深さ 0.2m を測る。埋土は黒色泥土で、暗灰黄色細砂ブロックを含む。9 世紀前半の土師器、須恵器が出土した。

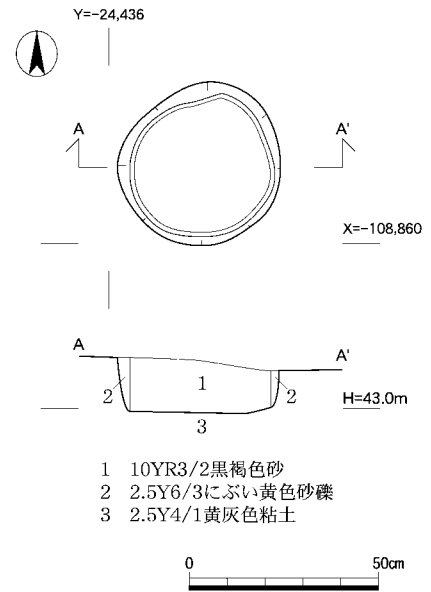


図 7 土坑 35 実測図 (1 : 20)

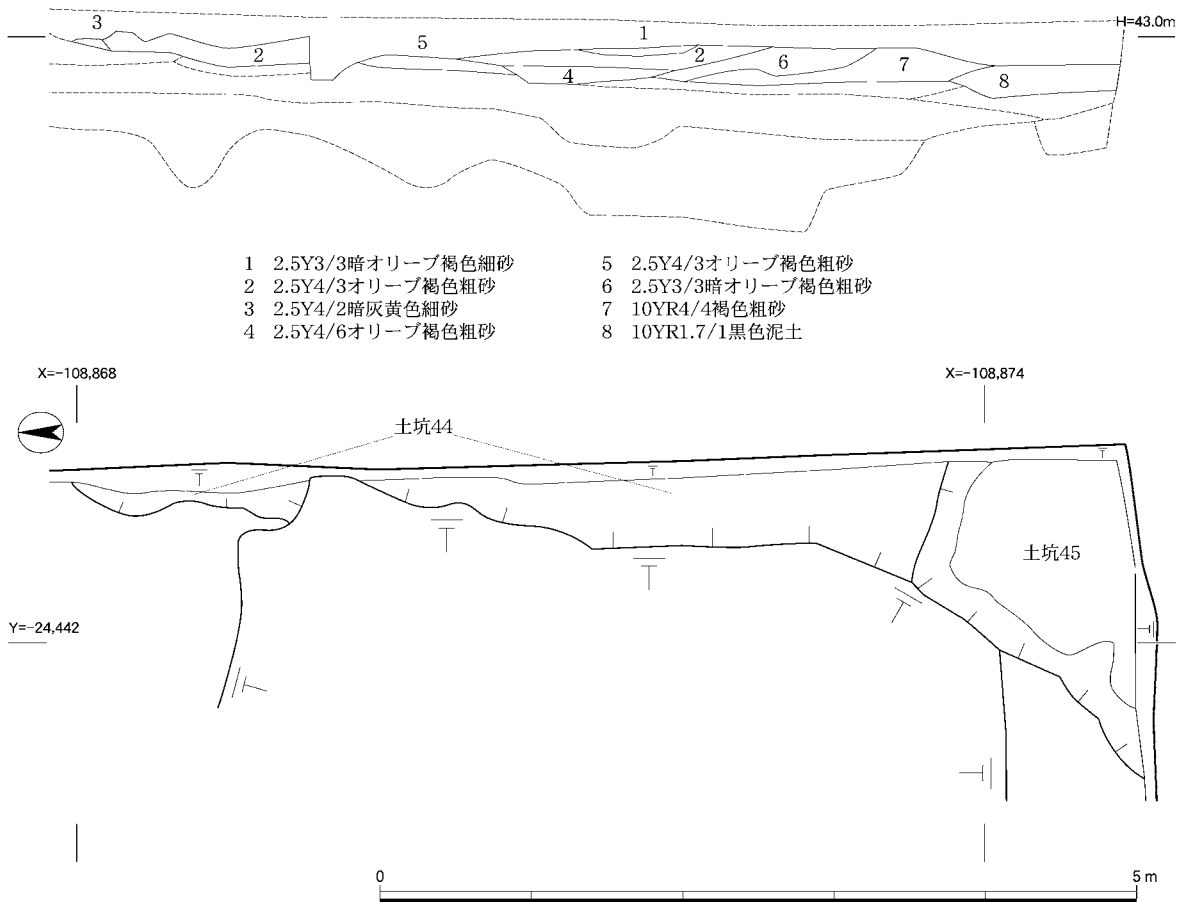


図 8 土坑 44・45 実測図 (1 : 50)

(2) 中世以降の遺構

土取土坑は、ほぼ調査地全域で検出した。地山である黄灰色シルト層を採取するためのものと考えられる。径 1.5 ～ 2.5m の円形から楕円形を呈し、壁は直立または内傾するものがほとんどである。底部は平坦で、明黄褐色砂礫（黄褐色粘質土混）の上面でとまる。埋土は、黒褐色砂泥や黒色泥砂に褐灰色粘土、黄灰色砂、黄灰色シルトや礫が入りまじる。出土遺物は、平安時代前期から中期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器が多量に出土したが、平安時代後半から中世の土師器、輸入陶磁器、焼締陶器などが少量出土している。土取土坑 17 からは石帯、土取土坑 23 からは凝灰岩切石、土取土坑 26 からは緑釉丸瓦が出土している

第 2 層黒色泥砂（黒褐色泥砂、黒褐色粘土、黒色泥土、黄灰色砂混）からも、土取土坑と同様に平安時代前期から中期の遺物が多量に出土し、平安時代後期から中世の土師器へそ皿や瓦質火鉢脚などが少量出土している。土質・土色とも土取土坑に類似しており、一部灰釉陶器などでは接合できる遺物もある。第 2 層は中世以降の土取後の客土による整地層と考えられる。

なお、第 3 層からは平安時代前期前半代の遺物が少量出土している。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	土坑35・44・45	
中世以降	土取土坑15～18・23・26～31・34・41・42	

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は、土器類、瓦類、石製品、木製品などで整理箱に22箱ある。平安時代前期から中期（9世紀後半から10世紀後半）の土器類が大半を占める。土器類には土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器があり、平安時代後期から室町時代（11世紀から15世紀）の土師器、輸入陶磁器、瓦器、焼締陶器なども少量出土している。軒瓦類には搬入瓦である重郭文軒平瓦や、平安時代前期の軒瓦類、緑釉丸瓦がある。石製品には面取りした凝灰岩や石帯がある。木製品には下駄、斎串、箸、曲物底板などがある。

(2) 土器類

土坑35出土土器（図9、図版3-1） 1～3は土師器皿Aである。口縁端部を小さく丸く上方へ突起させて収める。器壁は薄い。底部内面は粗いタテ方向のハケ調整。1・2は外面に8等分する墨書線描きがある。4は土師器椀Aまたは杯Aである。内面に白泥を塗る。底部内面はタテ方向の細かいハケ調整。10世紀前半～中頃。

土坑44出土土器（図9、図版3-2） 5は黒色土器A類椀である。外面はヘラケズリ、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整。6は土師器杯Lである。口縁部内外面はヨコナデ調整。7は須恵器壺Lである。底部は糸切り。8は須恵器壺である。土師器、黒色土器は小片であり、全形を図示できるものがない。9世紀後～10世紀前。

土坑45出土土器（図9、図版3-3） 9～12は土師器椀Aである。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整。13・14は土師器皿AⅡ、15・16は土師器皿AⅠである。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整。16は内面にハケの痕跡が残る。13は口縁部内外面に煤が付着。17は土師

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、木製品、石製品		土師器28点、須恵器33点、白色土器4点、黒色土器2点、緑釉陶器18点、灰釉陶器15点、軒瓦14点、木製品2点、石製品1点		
中世以降	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品		土師器3点		
合計		26箱	120点（4箱）	22箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

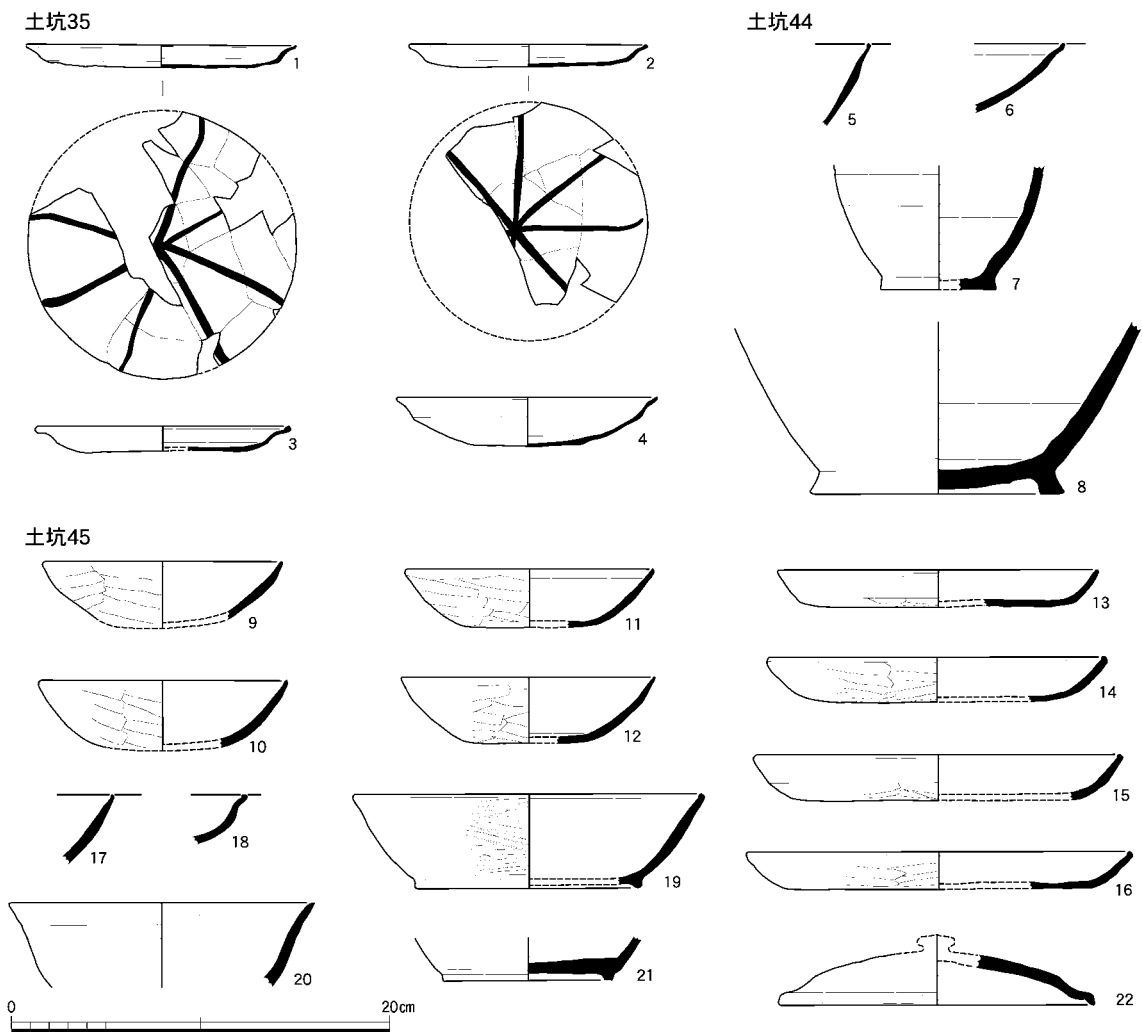


図9 土坑 35・44・45 出土土器実測図 (1 : 4)

器杯 A である。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整。18 は鉢か。内面および口縁部外面はヨコナデ、体部外面はオサエ後粗いナデ調整。19 は土師器杯 B である。外面は丁寧なヨコ方向のヘラミガキを施す。20・21 は須恵器杯 B である。20 は口縁端部が外反する。22 は須恵器杯蓋である。9 世紀初。

土取土坑他出土土器 (図 10 ~ 12、図版 4・5) 土取土坑、包含層 (客土)、攪乱から出土遺物の 95% 以上が出土した。土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などの器種がある。

土師器 (23 ~ 37) には、椀 (30・31)、杯、皿 (23 ~ 29・33)、蓋 (32)、壺 (34)、盤 (35・36)、ミニチュア土器 (37) がある。他に高杯、甕、鍋、羽釜などの器形がある。9 世紀後半から 10 世紀代の遺物が大半を占める。

23・24 は、いわゆるへそ皿で白色系の皿 Sh である。23 は底部中央を明瞭に押し上げたもので、15 世紀。24 は底部中央をわずかに上げられており、14 世紀前半。25 は皿 S で、14 世紀。26 はいわゆる「て」の字状口縁の皿 A で、11 世紀中頃から後半。29 は皿 N である。口縁端部が外

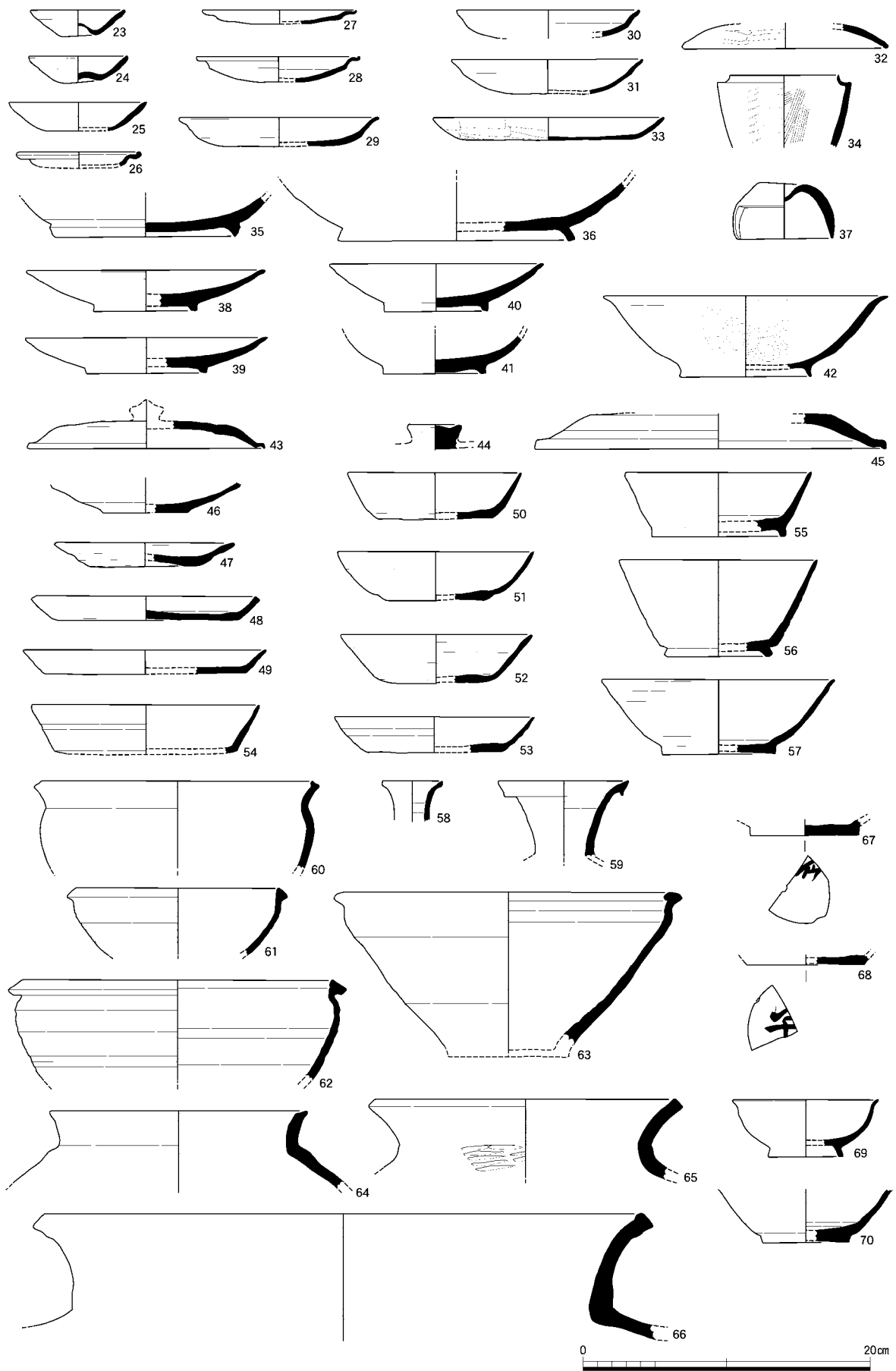


图 10 土取土坑他出土土器实测图 1 (1 : 4)

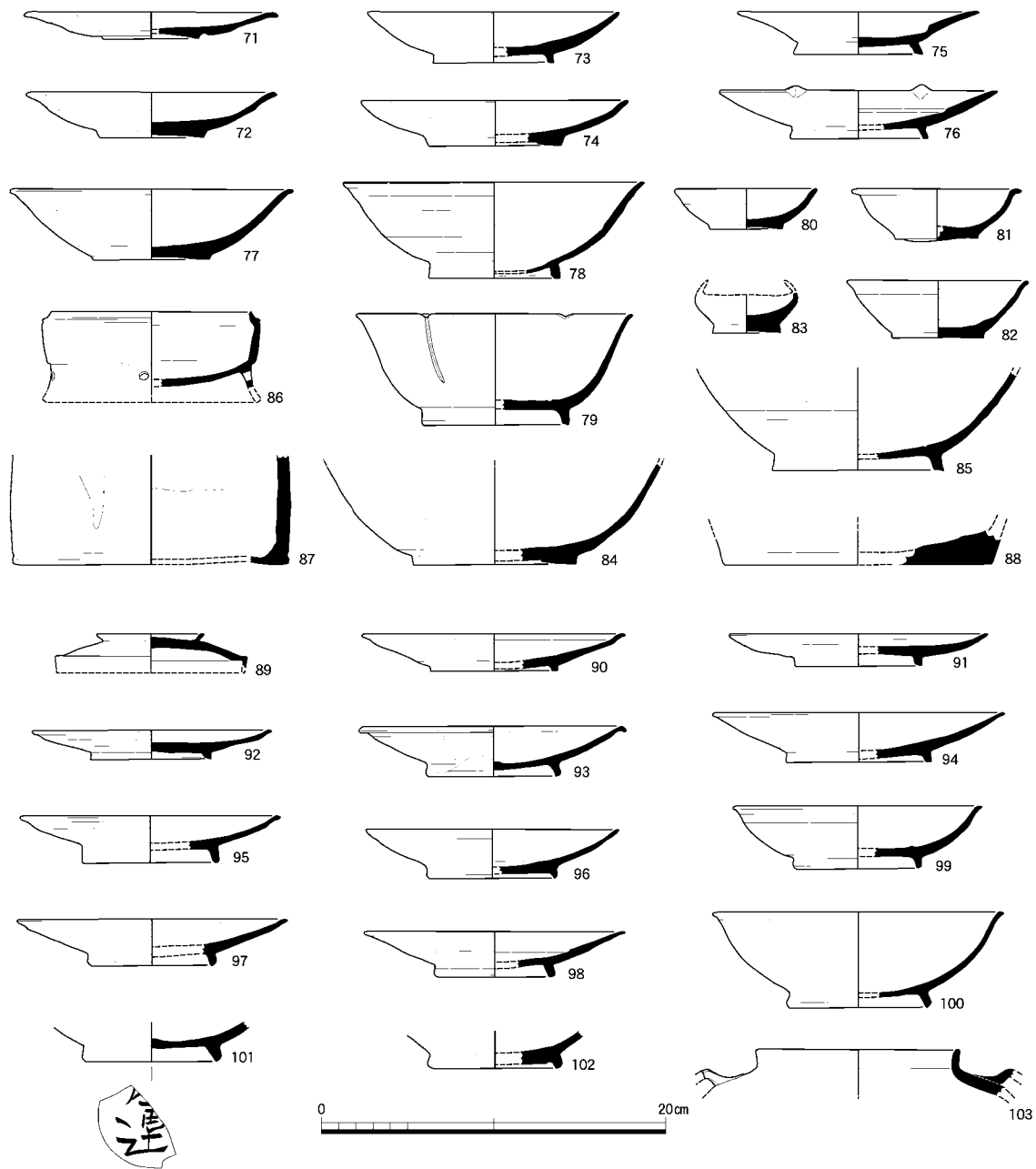


図 11 土取土坑他出土土器実測図 2 (1 : 4)

反し、外面がナデによる 2 段に凹みをもつ。11 世紀中頃から後半。27・28 は「て」の字状口縁の皿 A で、27 は 11 世紀前半、28 は 10 世紀末から 11 世紀初頭。30・31 は椀 A で、10 世紀前半から中頃。32 は蓋である。外面はヘラケズリで、ヘラミガキは認められない。9 世紀前半。33 は皿 A で、9 世紀前半。34 は壺 E である。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコ方向のヘラミガキ、体部内面はタテ・ナナメ方向の細かいハケ調整を施す。9 世紀初頭。35・36 は盤である。体部はナデ調整で、ヘラケズリ、ヘラミガキは認められない。35 は 10 世紀代、36 は 9 世紀後半と考えられる。37 はミニチュア竈で、9 世紀。

白色土器 (38 ~ 41) は、胎土は浅黄橙色を呈し、精良である。38 ~ 40 は皿である。口縁部はヨコナデ、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキを施す。41 は椀である。

外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整。9世紀後半から10世紀前半。

黒色土器(42)はA類の椀であるが、従来の器形とは異なり、金属器・磁器を模した器形である。丸みをもった体部で口縁部は外反する。高い高台をもつ。内外面とも丁寧なヨコ方向のヘラミガキを施す。9世紀前半。

須恵器(43～70)には、蓋(43～45)、皿(46～49)、杯A(50～54)、杯B(55・56)、椀(57・69・70)、壺(58・59)、鉢(60～63)、甕(64～66)などの器形の他に、硯、双耳壺などがある。

44は大型のつまみである。45は器壁も厚く、口径も23.4cmと大型の器形である。46は底部糸切り。47は口縁部の立ち上がりが不明瞭であるが、皿と考える。48は口縁端部に面をもつ。49は口縁端部を丸く収め

る。51・52は底部はヘラオコシ。51は軟質で、全面に煤が付着している。53は内面が擦り減り、墨が付着している。56は器体の凹凸が目立つ。57は瓷器形の椀で、底部は糸切り。69・70は緑釉陶器の素地である。69は貼付けの輪高台で、体部内外面はヘラミガキ調整。東海産。70は外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ調整。60は口縁部が「く」の字状に屈曲する形態である。61は口縁端部が断面三角形を呈する小型の鉢である。62・63は口縁端部が玉縁状を呈する。63は体部の開きが大きい。61・62は軟質で器体の凹凸が目立つ。64は短く立ち上がる口縁をもつ小型甕である。65は「く」の字状口縁で、口縁部内面はカキメ調整。66は口径40cmをこえる大型の甕である。いずれも胴部の調整は、外面は平行タタキ、内面は青海波文。67・68は底部外面に墨書。

緑釉陶器(71～88)には、皿(71～74)、段皿(75・76)、椀(77～82・84・85)、耳皿(83)、香炉(86)、壺(87・88)がある。

71は口縁部外面はヨコナデの後粗いヘラミガキ、体部から底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。円盤状高台で、淡黄色の素地に全面施釉する。72は口縁部はヨコナデの後ヘラミガキ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。円盤状高台で、灰白色の軟質の素地に淡緑灰色の釉薬を全面施釉する。幡枝産。73は外面体部下半から底部はヘラケズリ調整で、他はヘラミガキ。貼付け高台で、灰白色の素地に緑黄色の釉薬を全面に施釉する。輪花痕を有する。東海産。74は口縁部はヨコナデ調整で、内面はヘラミガキ。蛇の目高台で、にぶい橙色の軟質の素地に淡黄緑色の釉薬を全面に施釉する。75は貼付け高台部以外は全面ヘラミガキを施す。褐灰色の須恵質の素地に緑色の釉薬を全面に施釉する。東海産。76は貼付けの輪高台で、内外面に丁寧なヘラミガキ調整。灰黄色の素地に淡緑黄色の釉薬を厚く全面に施釉する。口縁部にヘラによる輪花を施す。77は円

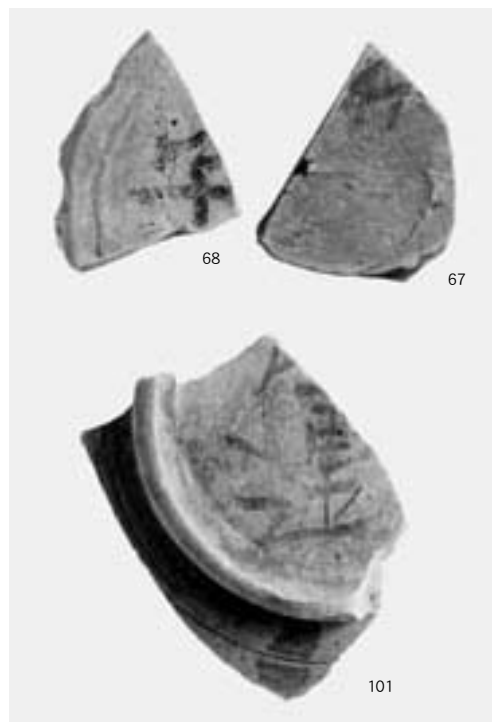


図12 墨書土器

盤状高台で、外面はヘラケズリの後粗いヘラミガキ、内面は粗いヘラミガキ調整。浅黄橙色の軟質の素地に淡緑色の釉薬を全面に施釉する。78は削出しの輪高台で、器壁は薄く、内面にわずかな段を有する。浅黄色の素地に淡緑黄色の釉薬を全面に薄く施釉する。山城産。79は深椀で、内傾する下端面が凹線状に凹む貼付け高台をもち、内面底部に凹線がめぐる。口縁部を小さくV字状に切り欠き、体部外面をヘラで押さえ花卉状に変形させ輪花とする。橙色の素地に濃緑色の釉薬を底部外面以外に厚く施釉する。近江産。80～82は小椀である。平高台で糸切り未調整。底部外面をのぞいて施釉する。80は京都産。84・85は大型椀である。84は蛇の目高台で、外面はヨコナデ、ヘラケズリ調整の後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。灰白色の素地に淡黄緑色の釉薬を全面に施釉する。85は貼付けの輪高台で、外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ調整。内面底部に凹線がめぐる。浅黄橙色の素地に緑灰色の釉薬を全面に厚く施釉する。東海産。83は平高台で糸切り未調整。灰白色の須恵質の素地に底部外面以外に、明オリーブ色の釉薬を薄く施釉する。京都産。86は内外面ともヘラミガキ調整。裾部に2個1対の孔を穿つ。淡黄色の素地にオリーブ黄色の釉薬を全面に厚く施釉する。87は胴部と底部の境に凹線をめぐらし、胴部は直立する。にぶい橙色の素地に淡緑灰色の釉薬を外面に施釉する。¹⁾

灰釉陶器(89～103)には、蓋(89)、皿(90～97)、段皿(98)、椀(99～102)、壺(103)がある。

89は環状つまみをもつ壺の蓋である。外面に厚く施釉する。内面は擦り減り墨が付着しており、硯に転用されている。90は低く細い輪高台を貼り付ける。口縁部および内面に薄く施釉する。91は内傾しわずかに凹む端面をもつ低い輪高台が付く。内面全体に厚く施釉する。92は口縁部がわずかに立ち上がる。内傾した端面の低い輪高台で、底部外面の糸切りは未調整のまま貼り付ける。内面および口縁端部に厚く施釉する。93は口縁端部がわずかに外反する。三日月高台が付く。口縁部内外面を漬掛けで施釉する。94は底部は細い輪高台。口縁部は直線的に外上方へのびる。口縁部外面および内面に厚く施釉する。95は断面が隅丸方形を呈する高い輪高台が付く。口縁部内外面に施釉する。96は底部に低い断面三角形を呈する高台が付く。口縁部はやや丸みをもって外上方へのびる。底部外面の糸切りは未調整。97は底部は低い三日月高台。口縁部は直線的に外上方へのびる。口縁部内面にハケ塗りで施釉する。98は底部は断面隅丸方形を呈するやや高い輪高台が付く。口縁部は直線的に外上方へのびる。口縁部内面に施釉する。99は浅い椀で、三日月高台が付く。口縁部内外面に施釉する。底部内面に重ね焼きの痕跡が認められる。100は底部はやや高い三日月高台。口縁部は丸味をもって外上方へのびる。口縁部内外面に施釉する。101はやや高い三日月高台を貼り付ける。体部内面に薄く施釉する。底部内面に重ね焼きの痕跡が認められる。底部外面に墨書。102は低い三日月高台を貼り付ける。底部外面の糸切りは未調整で墨書が認められる。103は短く直立する口縁部をもつ把手付短頸壺である。肩部に板状の粘土を貼り付ける。口縁部内面から外面に施釉する。

(3) 瓦類 (図13、図版6)

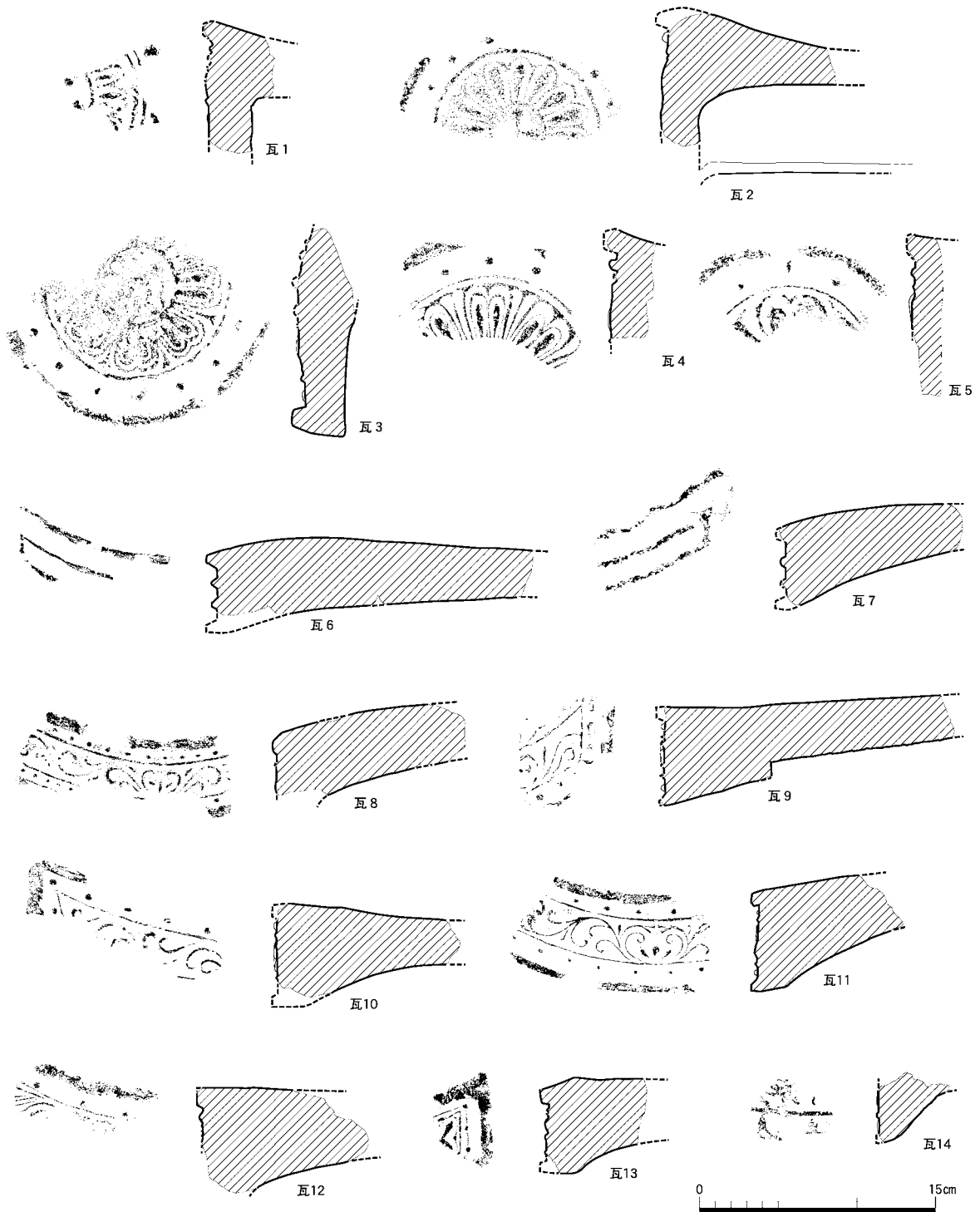


図13 軒瓦拓影・実測図(1:4)

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(瓦1)は、瓦当面の1/8程度残存する破片である。周縁は傾斜縁をなし、わずかであるが傾斜面に凸鋸歯文が確認できる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、色調は暗灰色(N3/0)を呈する。『平安京古瓦図録』²⁾2(平城宮6225A)に類似するものと考えられる。

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦(瓦2)は、瓦当部分が下半分欠落しているが、中房内に1+4の蓮子を結合させた様な「+」字形を呈する突出文がある。胎土は砂粒を多く含み、焼成は甘く、色調は灰色(7.5Y5/1)を呈する。『平安京古瓦図録』16と同文と考えられる。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（瓦3）は、瓦当部分が上半分欠落しているが、中房の中心の蓮子を取りまく圏線の痕跡が確認できる。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや甘く、色調は灰色（N4/0）を呈する。『平安京古瓦図録』27に類似するものと考えられる。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（瓦4）は、瓦当部分の上半分の破片である。胎土は3mm～5mm大の石を含み、焼成は良好、色調は灰色（N4/0）を呈する。5mm大の石を含む。『平安京古瓦図録』39と同文と考えられる。

複弁四葉蓮華文軒丸瓦（瓦5）は、瓦当部分の上半分の破片である。胎土は2mm～6mm大の石を含み、焼成はやや甘く、色調は青黒色（5PB2/1）を呈する。『平安京古瓦図録』67に類似するものと考えられる。

重郭文軒平瓦（瓦6）は、瓦当部の左端から平瓦部にかけての破片である。内区の重郭の断面は丸みをおびた三角形を呈し、中央と端で幅を異にしている。胎土は砂粒や炭化物を含み、焼成は良好、色調は灰色（5Y6/1）を呈する。

重郭文軒平瓦（瓦7）は、瓦当部の右端の破片である。内区の重郭の断面は台形を呈し、同じ幅である。また、外区の右端部分に横方向の範傷が認められる。胎土は精良、焼成は甘い、色調は灰白色（10YR8/1）を呈する。

均整唐草文軒平瓦（瓦8）は、瓦当部の中央部の破片である。胎土は精良、焼成はやや甘い、色調は灰白色（10YR8/1）を呈する。平城宮6721Aに類似するものと考えられる。

均整唐草文軒平瓦（瓦9）は、瓦当部の右端から平瓦部にかけての破片である。平瓦部凹面はケズリとナデ調整で布目痕をほぼ消している。顎は段顎でナデ調整を行っている。凸面には横方向の縄目タタキ痕がみられる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗青灰色（5BG4/1）を呈する。平城宮6682Aに類似するものと考えられる。

均整唐草文軒平瓦（瓦10）は、瓦当部の左端の破片である。胎土は5mm大の石を含み、焼成は良好、

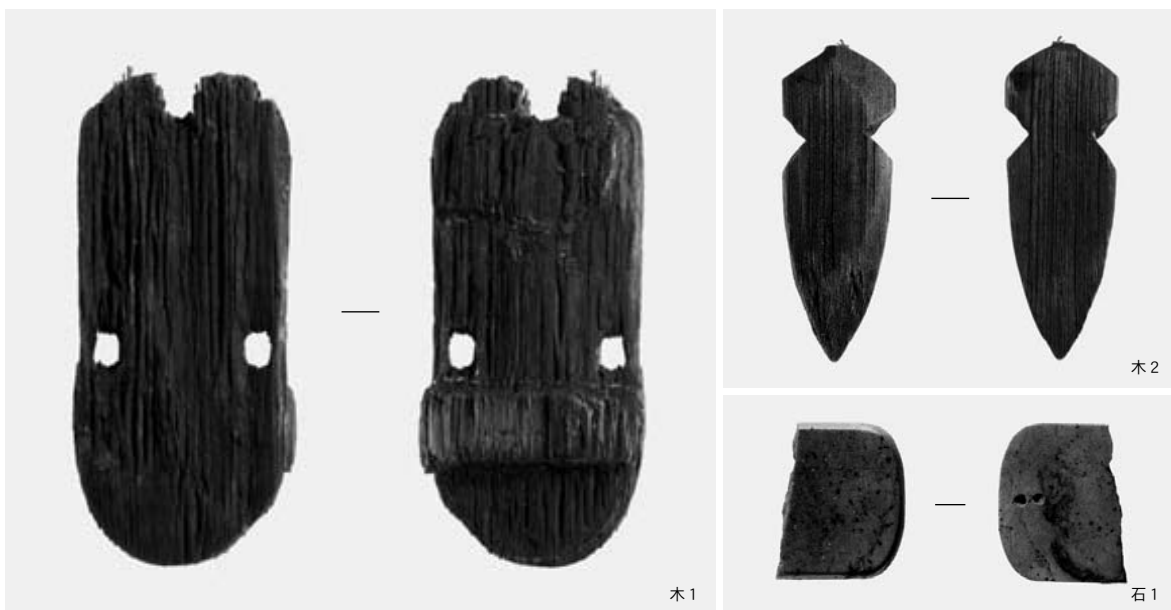


図14 木製品・石製品

色調は灰色 (N5/0) を呈する。『平安京古瓦図録』296～298に類似するものと考えられる。

均整唐草文軒平瓦 (瓦11) は、瓦当部の中央部の破片である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は褐灰色 (10YR5/1) を呈する。『平安京古瓦図録』316・329と同文と考えられる。

均整唐草文軒平瓦 (瓦12) は、瓦当面の一部が残る破片である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰色 (5Y6/1) を呈する。『平安京古瓦図録』313に類似するものと考えられる。

唐草文軒平瓦 (瓦13) は、瓦当部の右端の破片である。珠文帯には珠文の中心を結んで突線が通っている。胎土は10mm大の石を含み、焼成は良好、色調は暗青灰色 (10BG3/1) を呈する。『平安京古瓦図録』382は珠文の間に突線がある文様である。

軒平瓦 (瓦14) は、瓦当面の一部が残る破片である。胎土は5mm大の石を含み、焼成は良好、色調は緑灰色 (5G6/1) を呈する。

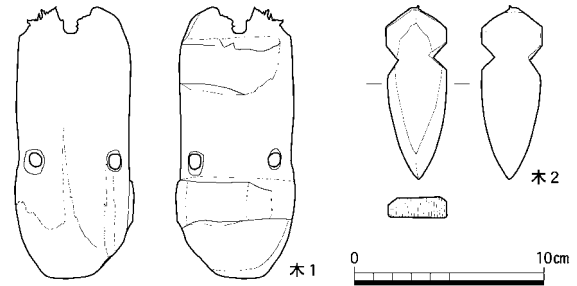


図15 木製品実測図 (1:4)

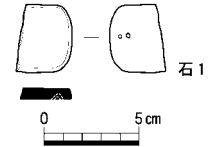


図16 石製品実測図 (1:4)

(4) 木製品 (図14・15)

下駄 (木1) は小型の小判形を呈する。長さ14.2cm、幅6.0cm。前壺を台の中央にあけ、後壺を歯の内側にあける。歯の下辺幅が台の幅より広い。歯の擦り減りが著しい。土取土坑26出土。

齋串 (木2) は上端を六角形にかたどり、下端を尖らす。側縁を削る。長さ9.0cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm。試掘1トレンチ出土。

(5) 石製品 (図14・16)

石銚巡方 (石1) は灰白色と淡緑灰色の縞状の色調。表面はやや風化気味で光沢はない。残存長2.8cm、幅3.5cm、厚さ0.6cm。裏面に潜り孔1箇所残存。土取土坑17出土。

註

- 1) 小森俊寛氏より形態、胎土、釉調などから長門産の可能性があると教示を得た。
- 2) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年

5. ま と め

調査地は、中御門大路および平安京右京二条二坊九町の北端中央部にあたり、東二・三行北一門に位置する。

今回の調査では、条坊に関連する遺構は検出できず、平安時代の遺構も3基（土坑35・44・45）しか検出できなかった。

また、当初園池遺構の可能性が高いとされた堆積土についても、攪乱や土取土坑などによって、その範囲や性格をつかむことはできなかったが、大路路面上まではみ出していることが問題として残る。

土坑35は、推定中御門大路の路面上に位置する。埋土内より、土師器の外面に線書き「米」による墨書、内面に白泥を塗った皿が出土した。地鎮に伴う祭祀遺構と考えられる。

今回の調査では、土取土坑や整地層から、平安時代前期から中期の多量の土器類が出土している。中でも、緑釉陶器、灰釉陶器の比率が大きく、緑釉丸瓦や凝灰岩切石などが出土していることから、平安宮内からの客土と考えられる。二坊内の調査では、十五町の発掘調査（表1-51）で室町時代後期の石組み井戸から緑釉丸瓦片が、十六町の発掘調査（表1-1）でも緑釉瓦片や凝灰岩片が出土している。同地における、中世以降の再開発に伴う土砂の移動と考えられ、留意する必要がある。

表4 掲載土器一覧表

No.	器種	器形	口径	高さ	底径	出土遺構	時期	備考
1	土師器	皿	14.2	1.2		土坑35	10c前～中	外面墨書「米」
2	土師器	皿	12.4	1.2		土坑35	10c前～中	外面墨書「米」
3	土師器	皿	13.2	1.4		土坑35	10c前～中	
4	土師器	椀	13.6	2.6		土坑35	10c前～中	内面白泥塗
5	黒色土器	椀		(4.4)		土坑44	9c後～10c前	A類
6	土師器	杯L		(3.7)		土坑44	9c後～10c前	
7	須恵器	壺		(6.6)	6.0	土坑44	9c後～10c前	
8	須恵器	壺		(9.1)	13.0	土坑44	9c後～10c前	
9	土師器	椀	12.6	(3.1)		土坑45	9c初	
10	土師器	椀	13.0	(3.6)		土坑45	9c初	
11	土師器	椀	13.0	3.1		土坑45	9c初	
12	土師器	椀	13.1	3.5		土坑45	9c初	
13	土師器	皿AⅡ	16.8	2.0		土坑45	9c初	
14	土師器	皿AⅡ	17.8	2.4		土坑45	9c初	
15	土師器	皿AⅠ	19.2	2.4		土坑45	9c初	
16	土師器	皿AⅠ	20.2	2.0		土坑45	9c初	
17	土師器	杯		(3.7)		土坑45	9c初	
18	土師器	鉢		(2.6)		土坑45	9c初	
19	土師器	杯B	18.2	5.0	11.8	土坑45	9c初	
20	須恵器	杯B	16.0	(4.5)		土坑45	9c初	
21	須恵器	杯B		(2.3)	9.0	土坑45	9c初	
22	須恵器	杯蓋	16.6	(2.7)		土坑45	9c初	
23	土師器	皿Sh	6.6	1.8		攪乱6	15c	
24	土師器	皿Sh	6.8	1.9		土取土坑16	14c前	
25	土師器	皿S	9.4	2.0		土取土坑28	14c	
26	土師器	皿A	8.4	(1.0)		土取土坑34	11c中～後	
27	土師器	皿A	10.8	1.0		土取土坑34	11c前	
28	土師器	皿A	11.4	(1.8)		土取土坑28	10c末～11c初	
29	土師器	皿N	13.8	(2.0)		土取土坑27上層	11c中～後	
30	土師器	椀A	12.6	(1.9)		土取土坑34	10c前～中	
31	土師器	椀A	13.4	(2.4)		土取土坑28	10c前～中	
32	土師器	蓋	14.2	(1.7)		土取土坑34	9c前	
33	土師器	皿	16.0	1.6		土取土坑34	9c前	
34	土師器	壺E	7.6	(5.0)		攪乱4	9c初	
35	土師器	盤		(2.8)	12.6	土取土坑34	10c	
36	土師器	盤		(4.1)	16.0	(B-1)1層	9c後	
37	土師器	ミニチュア竈		3.9	7.0	土坑21	9c	
38	白色土器	皿	16.6	2.9	7.2	土取土坑28	9c後～10c前	
39	白色土器	皿	16.8	2.5	8.4	(B-1)1層	9c後～10c前	
40	白色土器	皿	14.8	3.3	7.2	(B-2)2層	9c後～10c前	
41	白色土器	椀		(2.7)	7.2	土取土坑34	9c後～10c前	
42	黒色土器	椀	19.8	5.6	9.2	攪乱6	9c前	A類
43	須恵器	蓋	16.4	(1.9)		土取土坑28	9c	
44	須恵器	蓋(つまみ)				土取土坑41	9c	
45	須恵器	蓋	23.4	(2.5)		土取土坑34	9c	
46	須恵器	皿		(2.2)	5.8	土坑21	10c	
47	須恵器	皿	12.2	2.7		土取土坑17	10c	
48	須恵器	皿	15.2	1.7	13.0	3層	9c前	
49	須恵器	皿	16.8	1.7	14.0	土取土坑17	9c	
50	須恵器	杯A	12.0	3.3	8.0	(B-1)2層	9c	
51	須恵器	杯A	13.6	3.4	6.6	土取土坑34	9c後	
52	須恵器	杯A	13.2	3.4	8.0	(B-2)2層	9c後	

No.	器種	器形	口径	高さ	底径	出土遺構	時期	備考
53	須恵器	杯A	13.8	2.5	9.0	試掘2Tr. 2層	9c前	硯に転用
54	須恵器	杯A	15.8	(3.4)		土取土坑17・18	9c前	
55	須恵器	杯B	12.8	4.5	9.2	土坑33	9c	
56	須恵器	杯B	13.7	6.8	7.0	土取土坑17	9c	
57	須恵器	椀	16.0	5.2	7.8	(B-2) 2層	9c後	
58	須恵器	壺L	4.2	(2.9)		土取土坑28	9c	
59	須恵器	壺L	9.0	(5.3)		攪乱6	9c後	
60	須恵器	鉢	18.8	(6.1)		土取土坑28	9c後	
61	須恵器	鉢	14.0	(4.7)		土取土坑28	10c前	
62	須恵器	鉢	21.4	(7.0)		(B-2) 2層	10c前	
63	須恵器	鉢	22.4	(10.7)		土取土坑34	10c前	
64	須恵器	甕	17.6	(5.5)		土取土坑34	9c	
65	須恵器	甕	20.8	(5.7)		土取土坑16	9c～10c	
66	須恵器	甕	41.4	(8.8)		土取土坑34	9c	
67	須恵器	底部		(1.2)	7.6	(B-2) 2層		墨書
68	須恵器	底部		(0.7)	8.2	(B-1) 2層		墨書
69	須恵器	椀	10.2	4.0	5.2	重機掘削	9c後～10c前	緑釉陶器素地
70	須恵器	椀		(3.7)	6.0	攪乱25	9c中～後	緑釉陶器素地
71	緑釉陶器	皿	14.0	1.6	5.6	土取土坑42	9c前～中	
72	緑釉陶器	皿	14.0	2.7	6.0	土取土坑34	9c前～中	
73	緑釉陶器	皿	14.4	3.0	7.0	攪乱25	9c後～10c前	輪花痕
74	緑釉陶器	皿	15.2	2.7	7.6	攪乱6	9c後	
75	緑釉陶器	段皿	14.0	2.5	7.4	攪乱25上層	9c後～10c前	
76	緑釉陶器	段皿	16.0	2.8	8.0	土取土坑18	9c後	輪花
77	緑釉陶器	椀	16.0	4.1	6.7	土取土坑16	9c中	
78	緑釉陶器	椀	17.2	5.6	7.6	土取土坑30	10c前	
79	緑釉陶器	椀	15.8	6.5	8.4	土取土坑26	10c中～後	輪花
80	緑釉陶器	小椀	8.0	2.4	4.2	試掘2Tr. 2層	9c後	
81	緑釉陶器	小椀	9.0	2.9	4.8	攪乱25	9c後～10c前	
82	緑釉陶器	小椀	10.2	3.4	5.4	(B-2) 2層	9c中～後	
83	緑釉陶器	耳皿		(2.3)	4.0	1区南東壁	9c後	
84	緑釉陶器	椀		(5.9)	9.4	土取土坑34	9c中	
85	緑釉陶器	椀		(5.8)	10.0	土取土坑15	10c前	
86	緑釉陶器	香炉	11.6	(4.5)		土取土坑34	10c前～中	
87	緑釉陶器	壺		(6.4)	16.0	(B-2) 2層	9c後	水注か
88	緑釉陶器	壺		(2.0)	15.4	土取土坑30	9c	
89	灰釉陶器	蓋	6.2	(2.1)		攪乱25	9c	硯に転用 口径はつまみの径
90	灰釉陶器	皿	15.0	2.2	7.4	攪乱25	9c中	
91	灰釉陶器	皿	14.8	1.9	7.2	土取土坑41	9c前～中	
92	灰釉陶器	皿	12.4	1.7	7.0	土坑21	9c中～後	
93	灰釉陶器	皿	15.0	2.9	7.2	攪乱25	10c前	
94	灰釉陶器	皿	16.6	2.9	8.4	土坑39	9c前～中	
95	灰釉陶器	皿	15.0	2.2	7.4	攪乱25	9c後	
96	灰釉陶器	皿	14.6	2.9	7.2	(B・C-4) 2層	10c前	
97	灰釉陶器	皿	15.4	2.7	7.0	土取土坑34	9c後	硯に転用
98	灰釉陶器	段皿	14.8	2.7	6.4	土取土坑34	9c後	
99	灰釉陶器	椀	14.0	3.7	7.0	土取土坑26	10c前	
100	灰釉陶器	椀	16.4	5.6	8.0	土取土坑28	9c後～10c前	
101	灰釉陶器	椀		2.3	7.4	(B-2) 2層	10c前～中	墨書
102	灰釉陶器	椀		(2.2)	7.0	試掘2Tr. 2層	10c	墨書
103	灰釉陶器	把手付短頸壺	10.4	(2.3)		土取土坑41	9c	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうにじょうにぼうきゅうちょうあと							
書名	平安京右京二条二坊九町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-18							
編著者名	伊藤 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 にじょうにぼう 二条二坊 きゅうちょうあと 九町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうえんまち 西ノ京門町31	26100		35度 01分 06秒	135度 43分 56秒	2009年1月 5日～2009 年1月30日	200m ²	店舗建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京右京 二条二坊 九町跡	都城跡	平安時代	土坑		土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、白色土器、瓦、土製品、石製品、木製品			
		中世以降	土取土坑		土師器、瓦器、輸入陶磁器、陶器、瓦、木製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-18

平安京右京二条二坊九町跡

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961